

4 家族と親族

(1) 家と家族

家族

最近の分家の中には核家族もあるが、ほとんどの家では、直系家族で構成されている。現在でも、三世帯同居という家が多い。

家族の構成人員は、戦前は、子供が多かったので、10人以上の家も多かったが、現在では、平均6人～7人である。

家族員の呼称は、祖父、祖母を、オジイチャン オバアチャン、父、母は、オトツチャン オトツツァン オットー トーチャン オッカサン オカーチャン オッカー カーチャン 兄は、ニイサン ニーコウ 姉は、ネーサン ネーチャン ネーコウ などである。お嫁さんや、その他の弟妹、おじ、おばなど、その人の名前で呼ぶことが多かった。

その家の主人のことは、ダンナと呼んだ。

家長権

家長権を譲ることを「シンショウワタシ」（身上渡し）と言い、だいたい60才を過ぎた頃、跡取りに譲る。

主婦権

家長権を夫が譲った時に、妻も主婦権を、嫁に譲る。

相 続

長男に譲ることがほとんどで、男の子のいない場合は、長女に婿をとって譲る。子供がいない場合は、「養子あわせ」といって、夫婦者を養子に迎えることもある。

又、長男が死亡した時、弟が跡をとることがあるが、これは、「順養子」という。

又、つぶれ屋敷が出ると、そのニワバの有力者が、自分のイッケの中から人を出し、その屋敷を、つないでいく例もある。あるいは、その「つぶれ屋敷」の人間と血のつながりのある家

から、二男や三男を出して、姓はその「つぶれ屋敷」の姓を名のらせて、その屋敷をつないでいく方法もある。

分 家

他へ所帯を出すことを言い、シンヤ、シntax、ブンケなどと呼んでいる。それに対して、本家は、オオヤ、オモチ、ホンケなどと呼ぶ。

分家を出す時は、宅地300坪 畑1～2反を分けて出す。などと言うが、実際には、宅地に家を建ててやれば、良い方だと言う。

戦後すぐに弟を分家に出した家では、宅地52坪を、ホンケの地続きに分けてやっただけと言うし、又、昭和26年にブンケした家では、ホンケから、宅地170坪 畑3反もらったという。

現在は、二、三男に土地と家を建ててやる、分家が増えているが、当時、分家はめずらしくまして、震災前は、分家を出したという話は、ほとんど聞いたことが、なかったと言う。

分家した場合、実際に住んでいる所は、離れていても、本家と同じ組に入ることもあったし近くの別の組に入ることもあった。昭和26年に分家した人の場合は、本家とは別の組に入った。

一方、昔からの、ニワバの組には、すぐには入れてもらえず、昭和29年か30年になって、やっと石川弥八郎さんを中心とする方々をお願いして、加入金3000円（当時、月1万円とる人はめったに居ず、この3000円は、3年間に分割して払った。）を払って入れてもらった。

墓は、自分で、本家の近くを買うことが多かった。

本家とのつきあいは、結婚式には必ず呼び、葬式には行き、七五三、入学祝等の祝も必ずし、正月には、本家に半紙を持って挨拶に行く。盆や彼岸には、本家の墓にも、供えものを、あげる。

又、50年位前には、「奉行人分家」といって、サクダイ（作代）とオサンドン（お手伝いさる）が、一緒になったので、家と宅地をあげた。とか、サクダイに家と宅地をあげたという例がある。

隠 居

ただ単に、シンショウ（身上）を譲った後を、「隠居だ」といい、財産を持って、他へ所帯を持つという例は、ほとんどない。

今から4代前に、インキョブン（隠居分）と言って、良い土地をたくさん持って、後妻の子を連れて出た例があるという。

又、インキョヤ（隠居家）という建物があって、そこでその家の年寄が、近所の人に手習いを教えていた例もあるが、その場合も、いつも住んでいるのは、母屋であった。

奉公人

サクダイ（作代・作男）やネーヤ、ネーヤン（お手伝いさん）を、置いた家もあった。ある家のネーヤンは小河内から来た人だった。又、桧原の方から来た馬方を置いていた家もあった。

蚕の盛んな頃は、忙しい時に、10日～20日位、「カイコヤテット」と言って、狭山の方から人を頼んだこともあった。お茶をやっている家では、茶摘みにも人を頼んだ。

酒造では、トウジ（杜氏）が新潟から大勢きた。

奉公人の年期明けは、3月25日で、契約は4月1日。お休みになる日は、5月5日（節句）
7月15日・16日（盆） 8月1日（天王様） 9月1日（熊川神社の祭礼） 10月（運動会）
12月31日～1月1日・2日・3日（正月） 2月11日（稲荷講） 3月3日（節句）の日、く
らいだった。

(2) 親族と同族

親類

シンセキとも言い、血のつながりのある家、その家から、嫁や婿が出た人の家、自分の兄弟姉妹、父母の兄弟姉妹、妻の実家、おじいさんの兄弟姉妹などを指すという。

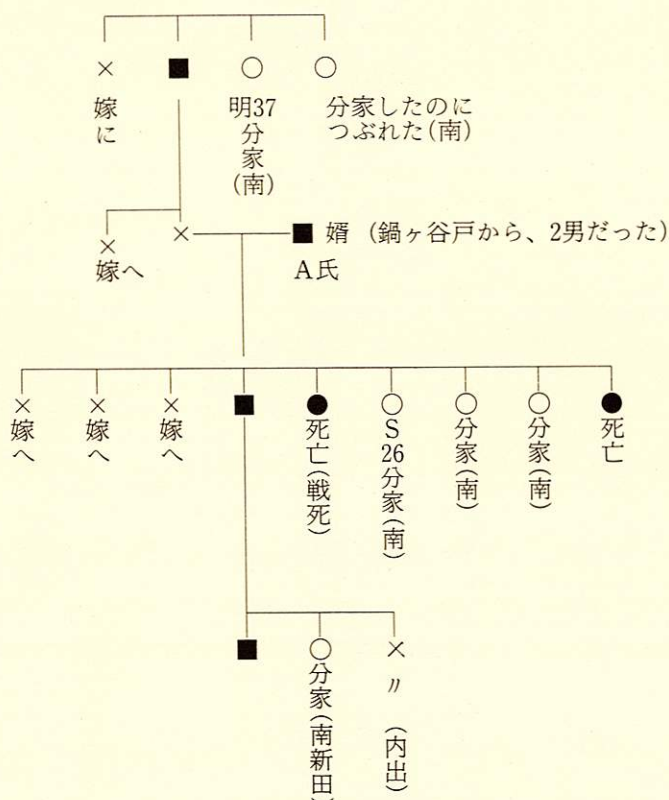
つきあいは、冠婚葬祭、正月、盆、彼岸の墓まいり等である。濃さによって、つきあいも、違うが、仏事の時は、かならず行く。

イッケ

本・分家関係にある一族をさす言葉。必ず同姓である。

I家の例

×=女 ○=男 ■=跡とり



イッケのつきあいは、葬式の時、特にはっきりする。例えば、A氏が亡くなった時は、(S 59)タチイリやクミアイの人が22人手伝ってくれた。1人につきお札を1万円お払いしたがその

費用22万円は「イッケ」が出した。その場合の「イッケ」は、A氏の子供で分家に出た3軒をさす。

このように、一口にイッケといっても、つき合いの度合は、違っている。

ジシルイ

ジルイとも言う、解釈は人によって違い、① 昔の親戚をさす ② 親の親戚をいう ③ 本家のことだろう ④ 近くの親戚のこと ⑤ 血縁関係はないが、昔、土地を分けてやった家のこと、何らかのヒツパリはあるのだろう。等である。

つき合い方も、ジシルイだと言うだけで、今はまったく、特別のつきあいをしない家、あるいは、葬式の時はクミアイと同様なつき合いをし、跡取りの結婚式や、子供が生まれた時は呼んだり、お祝いしたりするという家。ご祝儀の嫁迎えに行ってもらおうという家。親戚とまったく同じつき合いをする家、等いろいろである。

(3) 擬制的親子関係

仲人親

仲人してくれる人を、オヤブンとかセワニンとか呼ぶ。仲人した人と、された人は「オヤコの関係」という。

仲人を頼む人は、部落内の人が多く、同じクミの家で、お互いに、仲人しあう家、部落の、有力者に頼む家、親・子・孫、3代同じ人を頼んだという家、その時々で変わり、今は、勤め先の上司に頼むという家、等いろいろである。

盆・暮・正月には挨拶に行く。今は3年位というが、ある人は、正月は相手も返礼しなくてはいけないので、3年～5年位でやめるが、盆・暮は、返礼なしなので、その人が存命のうち、ずっと行ったという。その他、祝・不祝儀、家の建てかえの時は行く。農作業の場合は声がかかれば、行くが、そうでない場合は、手伝いには行かないという。

拾い親

ヒロイオヤという名称はないし、そういう事実も知らない。ただ話として、厄年に生まれた子を、人に頼んで拾ってもらおうということは、聞いたことがある。という程度である。